海外研究論文紹介

オリンピックの価値 ―何処へ？―¹

オモ・グルーペ²

訳者：滝沢文雄³

(注：ここに翻訳掲載した論文は、2000年6月ドイツ・フューレンで開催された第4回日独シンポジウムの際に、日本でも著名なオモ・グルーペ氏が行ったドイツ語による講演の原稿である。グルーペ氏からは、「体育・スポーツ哲学研究」への翻訳掲載の許可を得て、発表原稿の訂正版を後日頂いた。氏は現在、ドイツ・チュービンゲン大学体育学部研究科の特認教授として活躍されている。)

1.

伝統的に様々な価値がオリンピックの理念には書き加えられている。それを念入りに追求してきたハンス・レンクは、10の価値を挙げているのだが、他の著者達はそれよりも少ない。厳密にそれらを見ると、その価値は要約して五つになる。歴史的に見れば、当然これらの価値は、誰よりもクーベルタンによって方向付けがなされている。しかしこれまで、その価値は世界的な広がりの中で、彼以外の著者達によっても取り上げられてきた。とりわけオリンピック憲章の中に、さらには1994年にパリで開催された世界オリンピック委員会百年祭に向けたオリンピック会議閉会宣言において、それらは明確に定められた。本質的に五つの原則が重要である。

第一に、人間の調和的発達が問題になる。オリンピックの理念は一面的な身体の発達ではなく、人間の「調和」を目的にしている。「筋肉トレーニングは人間の陶冶までには至らない」

とクーベルタンが言ったように、それは包括的な教育と結び付く必要がある。しかしそれは目新しいものではなかった。調和教育は既にクーベルタンの時代には、教育学的思考の根本に属していた。

第二に、「自己の完成」が問題になる。現代では自己形成について語ることになるであろう。スポーツ活動は「人間的な完成への努力」を含むべきだ、とクーベルタンは記している。スポーツ的有能さを獲得する努力は、人間にとってより良い自己へと至る道であり、性格の形成はオリンピックの目的なのである。この自己を完全なものにするという考えもまた新しいものではなく、既に19世紀の新人文主義的思考の中で扱われていた。

第三に、アマチュアリズムの理想が重要である。この理想を、イギリスの頭脳労働者は、力仕事に携わる職人達がするスポーツ的競争との違いを設定するために役立てたのだが、クーベルタンの場合には、それは自己責任として理解されている。これは、スポーツに「騎士的な性

Research Trend Report

¹ Olympic Values—Quo Vadis

² Ommo Grupe, Institut für Sportwissenschaft der Universität Tübingen, Wilhelmstr. 124 Tübingen, D-72074 Germany.

³ Trans. by Fumio Takizawa, Chiba University, Yayoicho 1-33 Inageku Chiba, 263-8522 Japan

格」を伝え、スポーツ的な訓練を「浄化の過程」にすることである。クーベルタンが説明するように、アマチュアリズムにおいてかつては、「オリンピック競技者」を「円形競技場の剣闘士」に変えてしまうことから保護することが確かに問題であったが、他方では、総じて「勝利追求」の精神からスポーツを保護することが問題になっている。もちろんクーベルタンは、彼の言う「物質主義」を彼の時代に克服しようとしていたが、同時に、アマチュア規則の遵守が現代世界においては非常に難しくなるだろうと既に予想していた。だが、スポーツ選手は彼の考えるこの意味に、資金も手段もないままで従うべきだというのではない。何よりも彼は、物質的な勝利への関心が、スポーツ選手だけでなくそのスポーツにとっても、ともかくスポーツの支配的テーマにならないようにしようとしたのである。

第四番目の原則は、倫理規則とスポーツの結び付きに関係する。その場合何よりも公正さが問題となる。公正さとは、規則によって秩序づけられ、正義の原則から導かれたスポーツ実践を、まずは可能にさせるということだけでなく、何よりスポーツで生ずる激情的な若者の力が凶暴な乱闘に陥らないように、統制できるようにさせることを一さらにそのことを学ぶことも一意味している。したがって、クーベルタンにとって「オリンピック教育学」は、実践的「騎士道精神」についてのある一つの「学派」であった。この原則を背景に、次の見解が提示される。すなわち、人は公平な行動を教えによって理論的に学ぶのではなく、公平な行動が要求され、さらにそれが試される状況の中で、実践的に学ぶのである。そして、自己の体験と経験の中でそれがうまくつなぎ止められ、同時にその体験と経験によってそれが支えられる場合に、人は公正さを安定した特徴的個性として獲得するのである。クーベルタンの見解によれば、この達成はとりわけ一本来的には唯一——競技志向で達成志向のスポーツにおいて可能であった。

五番目の原則では、スポーツの平和理念が問題になる。重要なクーベルタンの中心思想は、人間や諸民族の間に必要となる平和を取り扱っている。このことは、今日ほとんど注意を払われていないが、スポーツに対する彼の文書においてはもちろんのこと、さらに彼の書いた多数の政治的出版物において見出すことができる。しかしこのクーベルタンにとって中心となる平和思想は、人の想像するようには、スポーツの基礎をなす達成原理と競争原理とに対立していない。逆にクーベルタンにとっては、その達成原理と競争原理は平和思想に奉仕するのである。それは、さまざまな家柄や宗教を持つ人間が、スポーツにおいてお互いにどのようにかわり合うのかを、すなわち、たとえ彼らが自分の興味を追い求めようと、一彼らがスポーツ的な競争の中で規則に従うのであれば一、どのように公正であり規則を守るのかを、模範的に示すはずである。それ故に、スポーツ、規則に従って秩序づけられたスポーツの競争、とりわけ国際的なスポーツの対戦、そしてそれらの中でも特にオリンピック競技は、相互的な尊重の中で、さまざまな皮膚の色、世界観、それに宗教を持つ人間の出会いとして、さらにはそれに伴う平和への積極的な努力の一部として、明確に理解されるはずである。これは100年前には新しい見解であった。が、そのときクーベルタンは世間知らずであったのではない。人が注意を払うようになるためには、何よりもまず知ることが必要である、と彼は記している。

クーベルタンはオリンピック・スポーツの構想に輪郭を与える為に、これらの五つの原則を役立てた。それはこの用意された新たな輪郭によって、名称を引き継ぎながらも、その構想は古代の手本と区別された。公正さを古代ギリシャの競技者は知らなかったし、国際性は彼らには明らかになじみがなかった。参加することがすべてであり、勝利のみが至福をもたらし得るわけではないということを、彼らは理解しなかったであろう。オリンピックの勝者であること

はむしろ最高の幸運であって、敗者は期待はずれの人であり、嘲笑され馬鹿にされ、多くの場合もはや家に帰る勇気さえ失った。オリンピック競技の新たな輪郭が容易に分かるように、クーベルタンは初めから「オリンピック教授学」または「オリンピック教育学」の概念を使用した。1912年、彼はその全体に対して「オリンピック主義」という概念を導入した。

クーベルタンの見解に従えば、そのように理解されたスポーツは、その頂点および特別な公的表現を、オリンピック競技の祭典とそこに参加するオリンピック選手の中に一良く知られているように彼は女子選手を念頭に置いていない―確かに見出せはするが、結局は、競技も競技者もオリンピック運動の単なる一部分なのである。クーベルタンにとっては、競技者はオリンピック理念の大使であったし、その競技は全世界にオリンピックのメッセージを届けるはずの出来事であった。しかし、世界中で知られるようになるためには、理念だけではもはや十分な影響力を行使できないということを、クーベルタンは現実としてよく分かっていた。その影響は、できる限り印象深い競技によって行き渡るはずであった。この見解と共に、クーベルタンは後のメディア世界の規則を、既にその時代がやって来る前に把握していた。そこでは、ともかくオリンピックの価値とほとんど無縁なメッセージを全世界的に搬送するためにスポーツの大イベントが利用され、そのために今や多くの金銭が支払われる。もちろんクーベルタンはそれを目論んだわけではなかった。

2.

このオリンピックの価値が「何処へ行くのか」という問いを、今われわれが立てるときには、スポーツにおいてそしてスポーツと共に、正確に言えばそのスポーツとは正に競技スポーツと達成スポーツであるが、その価値は何を生じさせるはずであったのか、ということをもまず初めに問うことになる。クーベルタンの見解に従え

ば、初めにイギリスで形成されたスポーツから「オリンピック・スポーツ」は生じたのであり、このスポーツは明確にその特殊性となる教授学的理解がなされるべきであった。そのスポーツは教授学的な核と教育目標を志向した哲学的・人間学的理念によって決定されるべきものであった。もちろんこのスポーツに、競技、競技者そして制度が属してはいるが、このスポーツに教授学的妥当性を求めるなら、それらに縛られてはならない。

しかしそのような確認はもはや今日、近代オリンピックの理念をつくりその教授学的性格を主張した人物、ピエール・ド・クーベルタンだけを拠り所にすべきではない。多くの他の著者達も彼の見解へと合流してきたのである。現行のオリンピック憲章とパリ閉会宣言も、既に言われてきたように、オリンピック主義の教育的な目標設定を際立たせる多くの発言、そして教育の重要な様式としてオリンピックの原理と一致したスポーツ実施に注目すべきであり、それゆえ特別にそれを奨励しなければならない、ということ強調する多くの発言を含んでいる。

このスポーツに対する「オリンピック的」という名称を、クーベルタンは古代オリンピアから借用した。しかし、彼はこの古い名称をある新しい意味で満たそうとした。彼の見解によれば、それでもやはりこの近代的意味は教授学的意味でなければならなかった。イギリス起源のスポーツをどのような目標設定に結びつけるのかという問いについて、彼の答えはかくして教育的意図からもたらされた。その際にそれは、競技者の個人的な教育だけを目指したのではなく、現代社会の諸問題に対する答えとして、その政治的、経済的、そして社会的発展と紛争に対する答えとして、さらにはそれと一緒に、19世紀を終結させ20世紀を導入し且つ苦しめた例の複雑な変遷過程に対する答えとして、理解されることを意図していた。しかし、クーベルタンによって追い求められたスポーツは、彼がイギリス・スポーツについて認識していたよ

うに、有用性と娯楽が優勢にならないようにすべきであった。そのスポーツは、それ自身から生ずる価値に、すなわち公正さ、より高度な達成、それに国際主義という価値に方向付けられるのと同様に、一般的倫理・教授学的原則にも方向付けられねばならなかった。なるほどイギリス・スポーツはクーベルタンにとって美しい名称、古代の遺産を思い出す名称としても見られていたが、同時にそれは、それまでスポーツの一部として既にあった、明らかに優れている教授学的輪郭を保持していた。この輪郭を明確にするために、クーベルタンは古代オリンピアから靈感を得て、単にその名称を見出した場所に戻るのではなく、スポーツ競技者と思想、フルート演奏と哲学との結び付きの中に、さらには美しい人間の肉体の芸術的表現と、石碑や詩に残された成果において、肉体と精神の一体性が実現されたに違いない場所へと戻るように、方向づけを行った。その新たなスポーツは、響き豊かな「オリンピック的」という名称によって評価が高まったに違いないが、この古い名称は近代の教育プログラムの為に設定すべきものであった。

しかし厳密に考えると、クーベルタンにとっては、それはどんなスポーツでも良いのではなく、達成と競技とに方向付けられ、公正さ、正義そして国際性という原則に基盤を持つスポーツであり、当時はまだ男性支配のスポーツでもあったが、オリンピック・スポーツを考慮したものでなければならない。なるほどクーベルタンは、健康指向のスポーツと健康的な肉体鍛錬をも重要なものとして見なしており、同様に女性にとってもそうだと考えていたが、このスポーツにおいて追求された原則は、競争的に実証するような状況で公平な行為によって行われるはずのオリンピック・スポーツの価値とは異なった彼の見方である。みずからの規則体系、公正さの思想、それに国際的性格を伴ったイギリス・スポーツに対するクーベルタンの決定も、そのように理解すべきである。それは正にドイ

ツ体操であり得たかもしれないが、その体操は彼にはとってあまりに国家的で非競技的に統制されていた。

そうではあるが、オリンピック固有のメッセージは、そしてこれは今日までいつも見過ごされてきているのだが、確かにオリンピック競技だけと結びつけられるべきではなかった。同様に、それはトップの競技者のみに向けられているのではなく、すべてのスポーツをする人々に向けられていた。クーベルタンが考えていたように、オリンピックのメッセージを聞こうと思う人は誰でも、それに従うのに不適当ということはないし、歳を取り過ぎているということはないであろう。拡張された万人にとってのオリンピック・スポーツは、すべての個人的で私的なスポーツ解釈とそれぞれの国で創り上げた様式すべてに優先させるべきだ、とするメッセージであった。

3.

しかしながら、そのスポーツが多様なイデオロギーと利害に結び付き、政治的な目的にとって、さらには時が過つにつれて、経済とメディアの目的にとっても必要となる可能性が明白になった後でようやく、オリンピック・スポーツの意味と価値のそのような解釈が証明された。政治化、商業化、薬品化そしてメディア化という用語は、どこことなく分かりづらいものの、それに対する略語なのである。今日、オリンピック・スポーツを決定する価値または決定すべき価値が、目の前にある現実有一部分だけ適合したり、もはや適合しなかったりすることを、もはや見過ごすことは出来ない。

現実と理想との間に対立があるということは、新しいことではない。それをクーベルタンは既に知っていた。高い価値による使命感は、失策が進展していることを隠し、具体的な利害を貫き通すことに、これまでいつも使われてきた。したがって今日、その価値の多くが見せかけとしてわれわれに現われている。スポーツマ

ンだけがオリンピックの倫理に違反するのではなく、役員、仲裁審判や競技審判もそうであり、オリンピック的なものの頂点にある「オリンピック」自身が、常にオリンピックの道徳について特別に厳密であるとは限らないのである。

したがって批評家は、みずからの価値を傷つけてしまうことになるオリンピック・スポーツの政治的で経済的な巻き添えを、またその価値に反するドーピングや非公正さを、示したがる。さらに彼らは、国の違いをスポーツは取り除くのだという主張が、スポーツという道のりの最終地点には正に素晴らしく教育された競技者だけがいるはずだという仮定と同じ位に、欺瞞的であることを指摘する。

それに対して、全世界にいるその他の多くの人々にとっては、オリンピック・スポーツは、その不完全さにもかかわらず、相変わらず何か特別なものに思われている。その価値を本気で受け止める人は、自分のスポーツ的達成と共に人格として成長する機会もそれが提供してくれるものだと、確信している。多くのスポーツ愛好家はこのような機会を利用してきたのであって、彼らにとって達成スポーツは、ある部分では自己形成であり自己発見になったのである。実際、スポーツは個々のスポーツ愛好家にとっては豊かさであり得る、が同時にその逆でもあり得る。このアンビバレント（両面価値）をクーベルタンは既に予見していた。「人はそれから引き出す」有用性に応じて、加えて「人がその中でそれを釣り合うようにさせるであろう方向」に応じて、競技は有益であったり有害であったりするであろう。それは可能性として、「最も低俗な激情と同様に、最も高貴なものをスポーツにもたらし。それは非利己心と自尊心を正に金銭欲と同じように発達させうる。それは騎士的になったり落ちぶれたり、男らしくなったり粗野になったりしうる。結局人は、戦争を準備するように、平和を強固にするために首尾良くそれを利用することができる。」と彼は1894年に書いている。

疑いなくオリンピック・スポーツは、肯定的にも否定的にも様々な効果を持ち得るのであって、教育は自動的なものではない。そうではあるが、それらはまずある定まった倫理的文脈の中で、そしてある相応しい期待地平に照らして、肯定的であるのか否定的なのかが定義できる。その期待とは達成であるべきなのか、それとも団結なのか、公正さか結果か、国家的威信か国際的理解か、商売なのか道徳であるべきなのか、それらがスポーツを決定する。その内のあるものは、互いに排除し合うような他のものと結びつき得るのであるのか。

そのかぎりでは、オリンピック・スポーツが効果を持つかどうかではなく、どれがその効果なのかが問われている。オリンピック・スポーツの将来的な発展の形が、どれもみな積極的に望ましいものとして見なされているわけではない。何よりもそのスポーツが、できるだけ拘束力のある倫理観に従うとき、はじめてその発展は追い求めるに値する未来へと通るのである。発展は不可避の宿命ではなく人間的な造形の結果である故に、背景的な縛りとして、行為の導きとなる価値をもう一度必要としているのである。だからこそ今日、どれがオリンピックの文脈の中でそうであり得るのかを問うことが、しかしそれとは別に、何がそれらの実現をとくとして脅かしたり妨げたりするのかを明らかにすることも、指摘されている。

このような展望のもとでは、そのような価値が遵守されねばならないという状況を用意する外的条件が、今日さらに困難になったということにとりわけ注意を払うべきである。社会の表現様式としてのスポーツは正に、価値の多様化と不明瞭さ、われわれの生活の個別化と個人化の増大、という社会の変化をも再び映し出している。このような関係の中で、特種なオリンピックの価値は不明確になってしまう。一方では大衆スポーツ、健康スポーツ、体験スポーツそして娯楽スポーツが、他方では達成スポーツそしてチャンピオン・スポーツが散り散りに漂っ

ている。その際常に、オリンピック的という用語が意味する事柄は、ますますばやけてしまうのである。

顧慮すべきは、オリンピック的達成スポーツが、みずからの範囲内だけで成長してきたのではなく、かつてあった以上に広範でしかも高度に、政治の、経済のそしてメディアの影響のもとで語られる、ということでもある。既にそれはみずからの広範な公共的興味を引き出しているし、外部の高い期待と結びつけられている。オリンピックの輝きによって多くの事柄が、しかもそのスポーツが興味を持つようなものではなくて、スポーツに付随して企業が興味を持つような事柄が、分け前にあずかろうとしている。常により高度な達成とより金のかかるスポーツ演出とが要求され、その中で表現されるスポーツ的な成果が公的に求められることを通じて、その発展は加速されるのである。

確かに達成スポーツは、みずからの内にも既に達成を高める要素を含んでいる。けれども、間違っ理解することの多い、より高く、より速くそしてより強くがオリンピックの中心思想として一層促進され支配的になればなる程、そして外部の興味を持つ人や受益者による影響が多大になればなる程、多くのスポーツ種目において、スポーツの手段を提供する人たちへの依存度は、ますます大きくなる。ほとんどの達成スポーツ愛好家にとって、この変化は常により高い達成への要請を意味し、その要請によって他方では、以前そうであったよりもはるかに多くの肉体的で精神的な負荷を引き受け、時間を浪費することが求められ、それと共に例えば、禁止薬物的な手段や不公平な行為を通じて利益を得るような、試行中に偶然でくわす危険を一方では助長させる。したがって、オリンピック・スポーツはどのような価値に従うべきか、そして今日、何がその積極的で教育学的に作用する要求を、さらに誰もが納得するように基礎付け得るのか、という問いの答えを見出すことが肝心なのである。

しかし、オリンピック・スポーツの意味と基礎付けをそのように問うことは、単なる観念的な問いではなく、オリンピック・スポーツ固有の関心において問うことでもある。最終的には、共感的で影響力があり、公正で薬物使用のない、要望の多いスポーツだけが、公的な承認と政治的援助の正しさを証明する。そうである限りそれは、誰もが納得する理想像によって、道徳的にかつ自己保存という関心においても、二重に利益を得るのである。

4.

今日のスポーツは、もはやクーベルタンに由来するものではない。それは変化し、世界的規模で広がった現象になり、「多くの分野に行き渡る文化の手本」になった。当然この理由から、オリンピック・スポーツの伝統的価値すべてが変わることなく永続し得るわけではない、ということは明白だと思われる。しかし、人間の尊厳と無傷性を尊重し、人格的な全体性を認める、という要求にとって大切な普遍的な価値が問題である故に、幾つかはそこから除外しなければならない。

それ以外の原則の一つが、再度見直され修正される。その原則とはアマチュア規定であり、それはわれわれの時代において今だになお、ほとんどすべての生活領域に浸透している商品化に対して、みずからを基礎付け持ちこたえることができない状態だった。よって、1981年にバーデンバーデンでのオリンピック会議で、その規定が廃止されたのである。

それでも他の価値については、文化的に要望が多く教授学的に意義深いスポーツの決定に役立つような、目的を伴った説明が必要である。

かくして今日「オリンピック的」とは何を意味しているのであろうか。

オリンピック的とは、まず根本においてはいくらか単純なものを意味している。すなわちそれは、オリンピック的に理解されたスポーツにおいては、公正さ及び平和との関連からスポー

ツの出来映えが見られねばならないこと、そしてこの意味で、スポーツを行うすべての人々にとってはそこに価値があるということ、を意味している。その場合にオリンピック的とは、スポーツの達成と行為における公正さへの熱望と合致した、ある一つの全体性という形を目指している。それはスポーツの達成段階すべてに当てはまる故に、僅かなスポーツの出来映えについての努力もオリンピックのイメージに適合しうるのである。スポーツの高度な達成は、確かにその印象深い表現様式ではあるが、同時にそれは、まずもってこの全体性原理に従うときに、特別な価値を持つことになる。

このオリンピック・スポーツにとって、本質的なのは達成志向と競技志向の原理である。しかしこの原則は、勝利や結果のためだけというより、それ以上を求めるものとしてある。それはある一定の自己形成の様式のためにあるべきである。スポーツの達成、そのための準備、そして競争におけるその証明は、自分を発見し自分を試すための挑戦として見るべきであり、その挑戦はスポーツ的能力を得ようとする公正な努力において可能となる。人はある一つの目的のためにだけ練習するのではなく、それを目指しながら自分自身をも鍛錬する。この意味で、ヴィリー・ダウメが再三強調したように、スポーツ的達成への道もまた重要であり、メダルや一位だけではないのである。

しかし、際立った達成の特別な承認もまたオリンピック・スポーツの自己理解に属している。高度なスポーツを可能にする集団が文化的だと誰もが納得するのは、それ自身の活動によってだけでなく、牧歌的な無気力をも同時に予防するからである。したがって、スポーツにおける高度な達成は、音楽、ダンス、バレエや絵画におけるように、特別な仕方でも文化と価値をつくり出すものであり、人間の可能性を探り出す表現なのである。しかしこれは、他の生活分野との違いの中で、既にある規則を考慮することによって明確になる。達成スポーツにおいて

は、可能であり得る事柄すべてが許されているわけではない。達成は現行の規則内でもたらされねばならない。しかしながら、これらの規則内では達成スポーツは無限である。そこにその特別な魅力があり、既にクーペルタンが注目していたように時には節度の無さもあるが、同時にその信憑性もそこに横たわっている。たとえば人が金銭をスポーツ的達成のために受け取ろうとも、そのことに何ら変わることはない。

さらに、それでもやはりオリンピック志向のスポーツは、すべての達成スポーツや競技スポーツを行う人々に刺激的であり、それ自身刺激たろうとすることを目標にしている。したがってオリンピック的なものとは、自分の出来栄を改善しようとする各々の努力であり得るし、いかなるスポーツのレベルでも、さらにスポーツ的な社会教育の枠内で常にその努力が生ずるところならばそうなのであり、よって、正にスポーツエリートの努力だけではないのである。

したがって、この文脈の中に何よりも公正さの理念があり、それが達成スポーツをいくらか特別なものにし、何の結果も生まないスポーツ的暇つぶしから区別する。この区別の中で、それには何ら本物の試練や挑戦がない、ということを表わしている。多くの問題が生ずるときに、たとえ困難な状況でも、さらに根拠のない有利さを断念する際も、記述されたスポーツ規則および非記述のスポーツ規則の遵守を学ぶことは、スポーツをいわゆる高い文化的段階へと持ち上げることを意味している。

今や人はこのすべてを、多様で複合文化的な世界という背景から見なければならぬのであって、そのような世界と共に、今日国際性へと向けられたオリンピック・スポーツが行われているのである。平和、相互的敬意そして寛容というオリンピックの価値は、特別な仕方での世界に適合している。それらはもちろん世界の争いを解決するのに十分ではない。しかしながら、争いごとと付き合うモデルをそれらは提供できる。オリンピック志向のスポーツは、明ら

かに他者の容認を前提にし、人種、宗教さらに性の差別に首尾一貫して反対する時に、それを強化さえする。ますます距離が縮小し、大陸どうしが近づくような世界においては正に、オリンピック・スポーツは特別な可能性さえ提供する。スポーツの言語と規則は、多くの他の生活領域のそれとは違って、世界的規模で理解できるのである。スポーツはある種最低限の倫理を供給し、文化的で政治的な差異を越えた共通点を、模範的な仕方で行き出す。

その際、高度な達成スポーツにおけるオリンピック主義は、肯定的にも否定的にも、メディア世界の中に最も凝縮した表現を見出している、ということが誰の目にも明らかである。その点で、高度な達成スポーツの選手達は、その最も効果的な代表者でもある。しかし、高度な達成スポーツとオリンピック競技は重要である、という主張が制限されるようであれば、それはオリンピック原理の縮小になるかもしれない。オリンピック主義は、高度な達成スポーツを越え出たときにのみ、国民教育への貢献を達成し、その「教化的な」力を展開するチャンスがあると、明らかにクーベルタンは考えていた。オリンピック教育とチャンピオン・スポーツで生ずるその価値を制限しようとするのは、何の意味もないし論理的でもないということは、彼にとっては明らかであった。実際このことは、課題と目的とがそれに伴うより程度の高い参加とさらに強く結び付き、それがその結び付き以上のものを前提にするだけでなく、その結び付きをも生み出し得るときに限って、正しいのかもしれない。しかし、すべての達成段階でそのようなより強固な結び付きは可能であるので、もしそれらがオリンピックの価値に従えば、要求の多いスポーツ行動それぞれは、さらなる個人的発達のきっかけをもたらすことができる。特に若者のスポーツと学校スポーツにとっても、それはまさしく妥当なことなのである。

しかしオリンピック・スポーツは、達成への

要求と出来栄への要求が無ければ、正しくは理解されないであろう。なぜならそれは、何の要求も提示せず、何の克服様式も提供しないであろうし、さらにそれに加えて、何ら特別な教育的意味が無くとも在り得るからである。自己の能力に見合った、ねばり強く我慢強い仕事を、もはややる気がなくなったり、何の楽しみも見出せなくなって短期間でやめてしまうことが、長期的なスポーツの目標設定からすれば意味のないことである、という考え方を伝えることは、オリンピック・スポーツにおいて重要である。このことが訓練と呼ばれている。美しいとはほとんど言えない指の練習も、美しいピアノ演奏に含まれているからこそ、この練習を通して、人はいつも楽しいとは限らないことをいわずにやり続けなければならないのである。その訓練は、自分ができるようになることを目指して、独自の教授学的質を持っているし、スポーツの出来栄にかかわっているその活動は、訓練だけを求めるだけでなく、ふさわしい練習態度をも生み出すのである。したがってそれは、こんなにたびたび宣伝されているファン・スポーツに対して、新たな可能性に向けた活動の目標設定を表わしている。

その上、オリンピック・スポーツにおける喜びと楽しみは、どのようなことがあっても禁じられはしない。そうではあるがそれらは、自分自身の達成を進展させるという目的と結び付き、スポーツと競技の中で、可能ならばそれ以外でも、公正な態度でいようとする努力と結び付いている。同様に、男女間や若者と年輩者間での他者との連帯感、達成が困難な人々とのさらに外国のスポーツ選手との連帯感、さらには平和を学ぶ努力に結び付いている。そのことはスポーツの内外を問わず寛容さとなる。

5.

今やオリンピック的価値の未来に関しては、その保護を考えると、その価値自身によっては何も生じない。人はそれらを得ようと努力しな

ければならない。スポーツを行う人ばかりでなく、スポーツ機関は、すなわち国家組織と国際組織、とりわけ国際オリンピック委員会は、公正、機会均等や平和という理念の確保に対して責任があり、敬意と寛容の保証に対して、さらにそれと共に倫理に根差したオリンピック・スポーツ文化の発展に対して、責任を持っている。ところが、オリンピックの価値の置き換えは、たいていは傑出した宣言や言説においてよりはむしろ、祝い、握手、励まし、公平な競争の正に人間的な小さな身振りの中に生じるのであり、それらは、より大きなメッセージを伝える印であり、それがスポーツの開催場所で常に現実化するのである。

何よりもまず外に対しては、肉体的達成において明示されるオリンピック・スポーツのこれらの価値は、今日ではもちろん相対化をも要求する。正にわれわれは、肉体的・スポーツ的な達成や表現様式と並んで、ある世界の中では、若者らしさ、達成能力、スポーツ性、健康そして適応性が、特別に追求するに値する価値だと説明しなければならない、が同様に、病気、虚弱、老い、苦しみさらには人間的生の無情さと、どれほどそれらが対立しているかにも注意を払わねばならない。

過去を振り返って考察してみると、クーベルタンのオリンピック主義構想は、19世紀末から我々が体験してきた世界における現代化過程の一部であることが証明される。スポーツもそれに属している。クーベルタンは将来を見つめ、現代世界の中心的な諸問題を先取りした。現代世界の個人的生活と社会的共同生活に対して、多くの人の体験、感覚、行為や経験にある重要な価値をつなぎ止め、それと共にその価値を強固にし、さらにそのための理想像を公的に、可能ならばそれを世界的規模で広げるということは、どのようにすればうまくいくのか。これが彼の将来展望であった。クーベルタンはそれらを、オリンピックの価値に基礎づけられたスポーツによって現実化できると信じてい

た。この未来像は、世界の諸問題に直面してその意味を失うことはなかったし、たとえ人が、その射程と実現可能性の中で、まずはそれを現実的にはそのスポーツに限定しなければならぬとしても、その意味は失われないのである。

しかし、このようなオリンピックの理念は、救済の告知や宗教の代用であってはならなかったし、政治とも交換不可能であった。それでもそれは、複雑な世界を背景に持つ生活に対して幾つかの重要な価値を模範的に提供する。クーベルタンというこの才知あふれ、機知に富んだ、教養の高い、時には辛辣な、しかし徹底的に理想主義的な改革教育学者、スポーツ教育学者さらには平和教育学者が心から願っていたように、たとえスポーツすることを通じてこれらの価値に従うスポーツマンが、他の生活領域の中でもそのように行うかどうかわれわれに分からないとしても、そうなのである。しかしそのことは、ともかくクーベルタンと結びついた大いなる希望を伴って、スポーツに持ち込まれているのであり、言わばそれは、もう少し良い世界でより良いスポーツを、という未来像なのである。同様に今日もしオリンピック・スポーツの世界が、人々の望んでいるような状態になっていないとしたら、そのことは、あるがままにさせておくべきだということではなく、そのスポーツがわれわれの望ましいものになるように努力しなければならないという内容を示しているに違いない。われわれはそのために、ふさわしい価値の紹介を必要としている。正しく理解されたオリンピック主義がそれを提供する。非拘束性、楽しさそして任意性によって広い範囲で特徴づけられるようになってしまったスポーツ世界においては、それに対する別の基礎づけられた価値が、これまで何も無い状態なのである。したがって、オリンピック・スポーツが持つ積極的な価値を、できうる限り広範にしかも包括的に妥当性へともたらすこと、さらにスポーツの中のそれらの意味を、上手い・下手、年齢にかかわらず、できうる限り多くの人々に根

付かせること、が重要である。

オリンピック・スポーツは、他ならぬクーベルタンの未来像の一部ではあるが、もちろん今後もより重要な部分であり続ける。もし、わくわくさせる楽しみを提供する出来事としてだけ、それを形成するのではなく、単にわくわくする以上の出来事と関連するような理念として、象徴化することに成功するならば、人はそれに対してある大きな未来を要望することになるであろう。世界中の多くの競技者、多くの若いスポーツマン、多くの観客、経済、メディア、政治さらになんといっても数多くの競技参加都市が、それを望んでいるからには、可能な限りもうしばらくの間は、それを存続すべきであろう。しかしそのためには、それに基礎を提供するような価値の説明と価値の基準をはっきりさせることが必要である。オリンピックの理念は多少歴史的であるので、永遠に不滅であるわけではない。したがって、それはいつも繰り返し議論されねばならなかった。長い間その発展と実現は、1936年ベルリンでの政治的道具化という痛ましきの絶頂と共に、悲しい政治的利害による圧迫のもとにあった。50年代、60年代さらに70年代においてもなお、それは政治的な東西対立に巻き込まれた。1972年ミュンヘンにおいては、「人間的ゲーム」という未来像へと変換すること、政治的陣営の調停に貢献すること、スポーツ、音楽、芸術、科学、民俗芸術、さらに都市生活にある理念のもとに結びつけることが試みられたが、同時にそれは、恐ろしいテロ行為によって突如打ち砕かれた試みであった。ミュンヘンにあるオリンピック・スタジアムでの葬儀に際して、アベリー・ブランデーによる言葉「競技は続けなければならない」は、意地、孤立無援そして希望をそのとき同時に映し出していた。

社会主義的体制の倒壊による政治的東西紛争の廃止と共に、ゲームの理念的な自立に対する政治的脅威は軽減した。それとは逆に、産業経済の脅威とメディアの脅威は増加した。しか

し、オリンピックの世界において、金銭はオリンピック的価値の発展と遵守にとって、中心となる調整原理ではあり得ないし、そうであってはならない。それはまさしく自己破壊になってしまうであろう。なるほど、十分な経済的条件無しに、その理念を実現することには疑問が持たれている。しかしオリンピックの特性と力、最終的にはその自立にあり、加えてそれは、スポーツという領域にとっては意味と方向感覚をほとんど喪失した世界において、時代に即して解釈された新たなオリンピック的価値を、誰もが分かるように伝えられるかどうかにかかっている。すなわち、文化財としてのスポーツを、信頼できる道徳と拘束力のある倫理によって育成することである。確かにこの目的を実現する道には多くの葛藤があるが、他に選択の道はないのである。

文献目録

- Blödorn, N. (Hrsg.): スポーツとオリンピック・ゲーム (Sport und Olympische Spiele). Reinbek 1984.
- Coubertin, P. de: オリンピック回想録 (Olympische Erinnerungen). Frankfurt 1959².
- Coubertin, P. de: オリンピックの思想. 講演と論文 (Der Olympische Gedanke. Reden und Aufsätze). Schorndorf 1967.
- Coubertin, P. de: 学校. スポーツ. 教育. 公的教育活動への思想 (Schule. Sport. Erziehung. Gedanken zum öffentlichen Erziehungswesen). Schorndorf 1972.
- Coubertin, P. de: 撰集 I-III巻 (Textes Choisis. Tome I-III). Zürich 1986.
- Diem, C.: オリンピックの思想. 講演と論文 (Der Olympische Gedanke. Reden und Aufsätze). Schorndorf 1967.
- Diem, C.: 永遠のオリンピア. 古典的テキストと現代テキストの出典集 (Ewiges Olympia. Eine Quellensammlung antiker und moderner Texte). Wuppertal 1971.
- Gesmann, G.: 学校におけるオリンピック教育への専門教授法に関する手がかり (Fachdidaktische Ansätze zur olympischen Erziehung in der Schule). In: sportunterricht 41 (1992), 193-200.
- Grupe, O.: オリンピック・スポーツ. 回想と展望 (Olympischer Sport. Rückblick und Perspektiven).

- Schorndorf 1997.
- Hermes, E.: 新しい時代のオリンピック運動. 社会政治的計画と現実的發展 (Die olympische Bewegung der Neuzeit. Sozialpolitisches Programm und reale Entwicklung). In: Grupe, O. 1999.
- Grupe, O. (Hrsg.): 洞察. オリンピック的スポーツの発展という観点 (Einblicke. Aspekte olympischer Sportentwicklung). Schorndorf 1999, 53-69.
- Höfer, A.: オリンピック的平和. ある理念の要望と現実 (Der Olympische Frieden. Anspruch und Wirklichkeit einer Idee). Sankt Augustin 1994.
- Internationales Olympisches Komitee (Hrsg.): オリンピック百年記念会議. 最終報告. 1994年9月. パリ (Congrès Olympique de Centenaire Congrès de l'Unité. Document Final. Paris, le September 1994). Lausanne 1994.
- Jennings, A./Simon, V.: 金銭, 権力そしてドーピング. オリンピック理念の終焉 (Geld, Macht und Doping. Das Ende der Olympischen Idee). München 1992.
- Jennings, A.: オリンピック連合. 五輪に隠されたみ
- すばらしい真実 (Das Olympia-Kartell. Die schätzbare Wahrheit hinter den fünf Ringen). Reinbek 1996.
- Malter, R.: 理想の実存としての「生命のオイリュトミー」. クーベルタンの歴史哲学的人間学へのコメント ("Eurhythmie des Lebens" als ideal menschlicher Existenz. Bemerkungen zu Coubertins geschichtsphilosophischer Anthropologie). In: Müller, N./Messing M. 1996, 9-16.
- Müller, N./Messing M. (Hrsg.): オリンピック理念の探索. アテネからアトランタまでの調査研究の特徴 (Auf der Suche nach der Olympischen Idee. Facetten der Forschung von Athen bis Atlanta). Kassel 1996.
- Powell, J. T.: オリンピック主義の起源と様相 (Origins and Aspects of Olympism). Champaign 1994.
- Schulz, N.: 互いを尊重し合う学習. オリンピック競技での文化交流教育の可能性と限界 (Sich gegenseitig achten lernen. Möglichkeiten und Grenzen interkultureller Erziehung bei Olympischen Spielen). In: sportunterricht 41 (1992)5, 201-208.

受理 2001年6月30日